

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します



合田 直弘

この会報が皆様の手許に届くのは、暮れも押し詰めた頃になるはず。ということで今月は、自身初めてとなる全米リーディングサイヤーランキング首位の座をほぼ手中にしている、種牡馬タピットを主役として取り上げたい。

2014年の北米の競馬をひと言で表現すれば「群雄割拠」で、飛び抜けた馬がいなかつたから、1年が終わろうとしている今も、年度代表馬は果してどの馬になるのか、少なくとも4頭の名前が俎上にあって、喧々囂々の議論が展開されていることと思う。

その一方で、種牡馬部門でほぼ「ひとり勝ち」と言ってよい独走態勢を築いたのがタピットだった。10月31日、ブリーダーズC初日のメイン競走として組まれたG1BCディスタフを、産駒のアンタパブル（牝3）が制覇。この段階で早くも、2014年のタピット産駒による総獲得賞金が1480万ドルを超えた。07年にスマートストライクがマークした1436万ドルを上回り、北米種牡馬年間最多賞金記録を樹立。この数字は12月10日時点でも1617万ドルまで積み上がり、当分の間は破られることがないであろうという領域まで達している。

G1ヴォスバーグSなど4つのG1を制したチャンピオンスプリンター・ルビアーノの半妹タップユアハートの初仔として生まれたタピット。1歳秋にキーンランド・

セブテンバーセールに上場され、馬主ヴァーン・ワインチエルの代理人デヴィッド・フィスクに62万5千ドルという高値で購入されているから、タピット自身の馬の出来も良かったのだろう。

セールのわずか2カ月後にヴァーン・ワインチエルが逝去したため、未亡人のジヨアンや子供たちのロナルド、クリスティーナらの共同所有馬となつたタピットは、マイケル・ディッキンソン厩舎から2歳秋にデビュー。2歳11月にG3ローレルフェューチュリティで重賞初制覇、3歳4月にG1ウッドメモリアルSでG1初制覇と順調に出世を遂げたが、その後は故障がちで、3歳シーズン一杯で引退して05年春にケンタッキーのゲインズウェイファームで種牡馬入りしている。

06年の初年度産駒から、全米2歳牝馬チャンピオンのスター・ダム・バウンド、G1アラバマS勝ち馬ケアレス・ジュエル、G1ハリウッド・スイターレットS勝ち馬ララー、そして日本へ渡りG1フエラリースを制したテスマッタが出現。瞬く間に人気種牡馬の座に駆け上った。

その後もコンスタンティに活躍馬を輩出してきたタピットだが、これが一段とスケールアップしたのが今季で、前出のB1Cディスタフを含む4つのG1を制したアンタパブル、G1ベルモントSなど2つのG1を制したトナリスト、G1フローリダーダービー勝ち馬コングステイチューーションなど、9

頭の重賞勝ち馬を輩出（12月10日現在）するという猛威をふるつた。

そして今年、新馬、プラタナス賞と連勝して17日のG1全日本2歳優駿出走予定のタップザット、2戦目の未勝利をレコードタイムで走破して大差勝ちしたゴールデンバローズなど、有望な2歳馬が出現して、日本における注目度も再浮上している。

これだけ産駒が走れば、マーケットにおけるタピット産駒の評価が急上昇するのも当然で、2014年に北半球で開催された1歳セールで購入されたタピット産駒の平均価格は、実に61万11525ドル（約7333万円）という、驚異の数字をマークしている。

そして、先ごろ発表された、タピットの2015年の公示種付け料は、前年から倍増の30万ドル（約3600万円）と、北米供用種牡馬では断然のトップとなつた。ちなみに「30万ドル」というのは、北米供用種牡馬としては09年にタピットの祖父エーピーベインディに設定されて以来とう高値だが、市場における産駒の評価を鑑みると、あながち法外な価格ではないのである。

タピットは今後も米国、そして日本で活躍馬を輩出し続けるのか。その動向に注目したい。